

赤カブ作りに挑戦！

「本紅赤丸蕪」

タキイ研究農場 林 祥治

赤カブは白カブにくらべて、肉質が緻密で、浅漬けやぬか漬、酢の物の材料に最適です。風味も豊かで彩りも鮮やかになり、料理の幅が広がります。赤カブには愛媛県の「伊予緋カブ」、滋賀県の「万木カブ」、岐阜県の「飛騨紅カブ」、山形県の「温海カブ」など全国各地で様々な在来種が栽培されていますが、今回は、比較的生育が早く作りやすい「本紅赤丸蕪」を紹介します。この赤カブは、①鮮紅色が美しい丸形の赤カブ、②茎葉も赤くなり、肉にも少し赤味がつく、③寒さに強く、土質を選ばず、作りやすい、④肉質は緻密で歯切れがよく、漬け物に最適、というように家庭菜園に向く品種です。



1 タネまきと畑の準備

❑ まき時

カブは比較的冷涼な気候を好むため、むやみな夏の早まきは避けます。一般的には、9月上中旬のタネまきが適しています。

❑ 土づくり

水もち、水はけをよくするために、耕土は深さ20cm以上を、よく耕すことが大切です。

有機質を施す時には、よく腐熟した堆肥を、タネまきの1カ月以上前に1㎡当たり3kg程度入れます。また、整地の前に石灰を1㎡当たり50～100g程度施します。

❑ 元肥

施肥は元肥を主体として、タネまきの1～2週間前には施肥し、十分に土になじませておきます。施肥量は畑の土質によ

って違ってきますが、1㎡当たり化成肥料を150～250g程度施します(チッソ成分10%)。

❑ タネまき

畝幅は80～120cmで、2～3条栽培として、条まきもしくは1カ所に3～5粒の点まきにします。

カブはタネが小さいため、畝の表面の凹凸や乾湿の差により、発芽の不ぞろいや生育ムラが起きやすくなります。そこで畝の表面は丁寧にならし、なるべく石などは取り除いておきます。

覆土(かける土)はできるだけ薄くします(タネが隠れる程度の厚さで十分です)。乾きやすい軽い土では、タネまき後に軽く鎮圧します。

乾燥を防ぎ、夕立などの降雨で畝の表面が打たれることを防ぐために、タネまきした後に、モミガラなどを薄くかぶせておく効果があります。

2 栽培のポイント

❑ 間引き

間引きの遅れは、根の肥大など、生育の遅れにつながるため、早めに行うことが大切です。

本葉2～3枚の時期に、株間8～10cm程度にします。本葉5～6枚で最終的に1本立ちにし、株間は15～20cm程度にします。

❑ 追肥

追肥は最終間引きのころに行い、軽く中耕し、土になじま

せます。

また、カブは初期生育がダイコンなどに比べるとややおとなしいので、草負けしないように除草・中耕をていねいに行います。

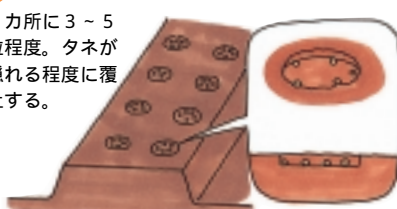
❑ ス入り、割れ

ス入りは、作物の老化現象の現れで、肥料切れや極端な乾燥によって助長されますので、生育をスムーズに進め、適期収穫を心掛けます。

また、元肥の遅効きや過剰な追肥は、生育後半の急激な肥大を招き、根割れの原因となるため注意します。

①

1カ所に3～5粒程度。タネが隠れる程度に覆土する。



〔点まき〕

ビール瓶の底などで浅く穴をあける。



〔2条の条まき〕

②

薄い覆土の後、軽く鎮圧する。



乾燥させないように水をまく。

③

乾燥防止にモミガラなどを薄くかぶせる。



タネまき作業

08-033-01
本紅赤丸蕪

1袋(約1,800粒) 155円
1dl 1,370円